

コウノトリの野生復帰における学びの場と兵庫県立コウノトリの郷公園の可能性 — 来園者への調査票調査から —

* 山室敦嗣¹・菊池義浩¹・中井淳史¹

A place for learning in reintroduction of the Oriental White Stork and possibility of Hyogo Park of the Oriental White Stork: a survey of visitors

* Atsushi Yamamuro¹, Yoshihiro Kikuchi¹ and Atsushi Nakai¹

¹ Graduate School of Regional Resource Management, University of Hyogo / Hyogo Park of the Oriental White Stork, 128, Shounji, Toyooka, Hyogo Pref. 668-0814, Japan

* E-mail: yamamuro@rrm.u-hyogo.ac.jp

はじめに

コウノトリの野生復帰を進める兵庫県立コウノトリの郷公園（以下、郷公園）は、2005年に7羽のコウノトリを試験放鳥した。その後の放鳥や野外繁殖によって、野外に生息するコウノトリは約140羽（2019年1月末）にまで増え、繁殖地も但馬地域を中心とする近畿地方北部にとどまらず、徳島県鳴門市や島根県雲南市に広がっている。両市は、コウノトリの飛来造巣をきっかけに野生復帰に取り組みはじめた。たとえば鳴門市では、2015年の造巣開始の直後に「コウノトリ定着推進連絡協議会」が設立され、地元農家の会長のもと、営巣部会・餌場確保部会・ブランド推進部会などの5つの部会が活動している。

今後は日本の各地でコウノトリの定着と繁殖が始まると予想され、飛来造巣型の野生復帰の実践がますます増えていくと思われる。全国の空を飛び回るコウノトリが野生復帰の種を方々に蒔きはじめたのである。

このようにコウノトリの飛来造巣は、コウノトリとの共生を試みる地域づくりの機運を高め、さまざまな活動

を地元でうみだす。とはいうものの、そうした活動において期待した成果が得られなかったり、人々の考え方の相違が顕在化したりするといった活動の停滞や中止に結びつくような事態が生じることも珍しいことではない。コウノトリと共生する地域づくりの過程には不確実性や関係者の意見の相違などがつきものである。こうした事態に直面したさい、コウノトリと共生する地域づくりとはいったいどのような営みなのかについて、地元の人々が多様な観点から学び、それを共有していくことができれば、活動の危機を乗り越えて持続的な地域づくりにつながるだろう。コウノトリも暮らす地域の実現には、息の長い活動が求められる。したがって、コウノトリと共生する地域づくりに取り組む人々が各自の状況におうじて多面的に学べる場の充実が、全国各地にコウノトリが飛来造巣するという段階を迎えた野生復帰の進展には欠かせない。

コウノトリと共生する地域づくりに取り組む人々が、その活動のあり方について多面的に学ぼうとしたとき、まず思い浮かべるのは野生復帰を先駆的に実践してきた郷公園だろう。郷公園を訪れることによって今後の活動のヒントが得られたり、活動意欲が高まったりすることを期待するように思われる。とするならば、郷公園はこのような期待に応えられる学びの場を提供していく役割が今後求められるだろう。

現在の郷公園は、コウノトリの観察会や生き物調査などのかたちで環境教育を行っており、一定の学びの場を提供している。とはいえ、コウノトリと共生する地域づくりに取り組んでいる人々にとっては、共生する地域のイメージについて意見を交換できたり、そのイメージを具現化するための知識と技術を習得できたりするような学びの場も必要だと思われる。したがって郷公園は、これまで提供してきた学びの場の検討と今後のあり方を模索しなければならないのではないかと。

郷公園のソシオ研究部（注1）は上述した関心のもと、来園者に調査票調査を行なった。郷公園の来園者への調査票調査にもとづいた先行研究には浅野ら（2009）と菊地（2017）の成果がある。両研究はコウノトリの野生復帰と観光化というテーマのもとで、郷公園を豊岡市

¹ 兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科／兵庫県立コウノトリの郷公園

668-0814 兵庫県豊岡市祥雲寺128

* E-mail: yamamuro@rrm.u-hyogo.ac.jp

表1. 調査票の構成.

| 質問番号 | 質問内容 |
|------|----------------------|
| 1 | 野生復帰の取り組みを見聞きした媒体 |
| 2 | 野生復帰に対する来園前のイメージ |
| 3 | 来園回数 |
| 4 | 来園目的 |
| 5 | 園内で訪れた場所 (複数回答可) |
| 6 | 園内での滞在時間 |
| 7 | 印象に残ったもの・こと (複数回答可) |
| 8 | 郷公園の満足度 |
| 9 | 野生復帰への関心の高まり |
| 10 | 郷公園に期待すること |
| 11 | 郷公園の良かった点・改善点 (自由記述) |
| 12 | 性別 |
| 13 | 年齢 |
| 14 | 職業 |
| 15 | 来園に利用した交通手段 |
| 16 | 居住地 (都道府県・市町村) |

表2. 回答者の年齢構成.

| 年代 | 件数 | (除不) % |
|--------|-----|--------|
| 20歳未満 | 4 | 1.9 |
| 20代 | 12 | 5.6 |
| 30代 | 47 | 21.8 |
| 40代 | 29 | 13.4 |
| 50代 | 30 | 13.9 |
| 60代 | 52 | 24.1 |
| 70歳以上 | 42 | 19.4 |
| 不明・無回答 | 24 | - |
| 計 | 240 | 100.0 |

内の観光ルートのかなかに位置づけ、来園者の旅程などの観光行動と旅行で重視する事柄、満足度といった観光意識に焦点をあてた調査を行なっている。両研究は、野生復帰が進展するなかでコウノトリや郷公園が観光資源として位置づけられていく側面に着目し、観光資源化による自然再生と地域再生について考察している。

それに対して本研究は、コウノトリの野生復帰の進展に応じて学びの場が必要になるという側面に着目し、学びの場の創出をめぐる郷公園の可能性について考察するものである (注2)。このような研究の一環として今回は、特別公開日の来園者に対して園内行動とコウノトリの野生復帰に関する意識についての調査票調査を行ない、郷公園が提供している学びの場の現状を検討することを試みた。特別公開日には一般の方が普段は入れない飼育ゾーンやコウノトリの治療室・手術室が公開され、

表3. 来園に利用した交通手段.

| 交通手段 | 件数 | (除不) % |
|--------|-----|--------|
| 自家用車 | 177 | 81.2 |
| 観光バス | 29 | 13.3 |
| 路線バス | 4 | 1.8 |
| 鉄道 | 1 | 0.5 |
| タクシー | 2 | 0.9 |
| その他 | 5 | 2.3 |
| 不明・無回答 | 22 | - |
| 計 | 240 | 100.0 |

表4. 来園者の居住地.

| 居住地 | 件数 | (除不) % |
|--------|-----|--------|
| 兵庫県 | 103 | 51.8 |
| 大阪府 | 41 | 20.6 |
| 京都府 | 18 | 9.0 |
| 三重県 | 1 | 0.5 |
| 滋賀県 | 1 | 0.5 |
| 奈良県 | 2 | 1.0 |
| 和歌山県 | 2 | 1.0 |
| 近畿地方以外 | 31 | 15.6 |
| 不明・無回答 | 41 | - |
| 計 | 240 | 100.0 |

表5. 兵庫県内来園者の居住地.

| 居住地 | 件数 | (除不) % |
|-----|-----|--------|
| 豊岡市 | 37 | 36.6 |
| 神戸市 | 9 | 8.9 |
| 明石市 | 9 | 8.9 |
| 姫路市 | 5 | 5.0 |
| 養父市 | 5 | 5.0 |
| 朝来市 | 5 | 5.0 |
| その他 | 31 | 30.7 |
| 計 | 101 | 100.0 |

その場で飼育員や獣医師による解説が行われるため、通常の開園日に比べて学習機会が幅広く提供されていると考えたからである。

調査方法

今回の調査は、2018年10月20日 (土曜日)、特別公開日の初日に実施した。兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科の演習科目「地域社会フィールドワーク1・2」の一環として、教員と院生を含め総勢11名が参加した。

調査票の質問項目は、16項目である (表1)。来園者の限られた時間のなかで調査への協力をお願いしなければならず、ごく短時間で回答できるように質問項目をできるだけ少なくする必要があった。そのため来園者のな

表6. 来園回数.

| 来園回数 | 件数 | (除不) % |
|--------|-----|--------|
| 1回目 | 125 | 55.3 |
| 2回目 | 29 | 12.8 |
| 3回目 | 25 | 11.1 |
| 4～5回目 | 18 | 8.0 |
| 6～10回目 | 25 | 11.1 |
| 11回目以上 | 4 | 1.8 |
| 不明・無回答 | 14 | — |
| 計 | 240 | 100.0 |

かには後述のとおり、2回以上の来園経験をもつ人々も少なくなかったが、過去の来園経験についての質問を設けることができなかつた。これらの制約のため、必ずしも十分な調査データが得られたわけではないが、来園者の今回の園内行動とコウノトリの野生復帰に関する意識については、ある程度明らかにできていると思われる。

調査票の配布と回収は、郷公園入口の東側に設置したテント内にテーブルを設置し、見学などを終えて出園する方に調査票を配布して各自で記入してもらった。また、配布と回収の時間は、開園の午前9時から閉園の午後5時まで行なった。当日の来園者数は1,147人で、そのうち242人に調査票を配布・回収し、240票の有効回答数が得られた。

来園者の園内行動とコウノトリの野生復帰に関する意識

1. 回答者の特徴

まずは回答者の特徴についてみてみよう。性別は、男性が48.8%、女性が51.2%とほぼ同数であった。

表2より回答者の年齢をみると、20歳未満が1.9%、20代が5.6%、30代が21.8%、40代が13.4%、50代が13.9%、60代が24.1%、70代以上が19.4%であった。今回の調査では中学生以上を対象としたので20歳未満は少なくなっているが、20代の割合は1割に達しておらず、他の年代に比べて低い。

回答者の職業は、会社員・公務員が43.9%、無職が17.6%、主婦・主夫が16.6%、パート・アルバイトが11.7%、自営業が5.4%、学生・生徒が2.0%、農林漁業が1.5%、その他が1.5%であった。

来園手段は表3に示しているように、「自家用車」が8割以上と飛び抜けて多く、「観光バス」が1割強であった。また、路線バスなどの公共交通機関を利用した

表7. 来園目的.

| 来園目的 | 件数 | (除不) % |
|-------------------|-----|--------|
| コウノトリを間近で見る | 109 | 61.6 |
| 非公開エリアを見学する | 27 | 15.3 |
| コウノトリの生態を知る | 5 | 2.8 |
| コウノトリの野生復帰の取組みを知る | 5 | 2.8 |
| 写真を撮影する | 1 | 0.6 |
| 園内を散策する | 17 | 9.6 |
| 特になし | 5 | 2.8 |
| その他 | 8 | 4.5 |
| 不明・無回答 | 63 | — |
| 計 | 240 | 100.0 |

来園者はごくわずかであった。

居住地をみると(表4)、兵庫県が51.8%と回答者の半数を占め、次いで大阪府20.6%、京都府9.0%であった。この3府県からの来園者が約8割と高率である。これ以外を地方別に示すと、中部地方が5.0%、関東地方が4.5%、中国地方が3.5%、九州地方1.5%、四国地方0.5%、東北地方0.5%であった。この結果より、兵庫・大阪・京都を中心とした近畿地方からの来園者が圧倒的に多いことがわかる。

表5は、兵庫県内からの来園者の居住市町を示したものである。豊岡市36.6%、神戸市8.9%、明石市8.9%、姫路市5.0%、養父市5.0%、朝来市5.0%と、兵庫県内からの来園者の約4割が豊岡市居住者である。

来園回数について尋ねたところ(表6)、今回初めて来園したという人が55.3%、2回目が12.8%、3回目が11.1%、4回～5回目が8.0%、6回～10回目が11.1%、11回目以上が1.8%と、約半数がリピーターであった。リピーターが半数近くいたという調査結果からは、過去の来園経験が今回の回答になんらかの影響を与えていることが推察できるが、今回の調査では、上述した理由から過去の来園経験についての質問を設けていないため、それとの関連を分析することは難しい。今後の課題としたい。

2. 特別公開日における来園者の園内行動

郷公園を訪れる人はどのような目的をもっているのだろうか。表7は、来園目的について尋ねた結果を示したものである。「コウノトリを間近で見る」が61.6%と飛び抜けて多く、次いで「非公開エリアを見学する」が15.3%、「園内を散策する」が9.6%となった。その一方で、「コウノトリの生態を知る」2.8%、「コウノトリの野生復帰の取組みを知る」2.8%であり、コウノトリの生態や野生復帰事業について知りたいという動機で来園

表8. 園内で見学した場所 (複数回答).

| 見学場所 | 件数 | (除不) % |
|-------------|-----|--------|
| コウノトリ文化館 | 181 | 79.7 |
| 公開ケージ | 150 | 66.1 |
| 大学院 | 8 | 3.5 |
| 「コウノトリの診療所」 | 45 | 19.8 |
| ビオトープ | 62 | 27.3 |
| 非公開エリア | 85 | 37.4 |
| 西自然観察路 | 22 | 9.7 |
| 東自然観察路 | 19 | 8.4 |
| その他 | 0 | 0.0 |
| 不明・無回答 | 13 | - |
| 計 | 240 | - |

表9. 園内での滞在時間.

| 滞在時間 | 件数 | (除不) % |
|-----------|-----|--------|
| 30分未満 | 41 | 17.2 |
| 30分~1時間未満 | 102 | 42.9 |
| 1時間~2時間未満 | 69 | 29.0 |
| 2時間~3時間未満 | 23 | 9.7 |
| 3時間~4時間未満 | 2 | 0.8 |
| 4時間以上 | 1 | 0.4 |
| 不明・無回答 | 2 | - |
| 計 | 240 | 100.0 |

する人たちが非常に少ないことがわかる.

次に, 来園者の園内での行動についてみていこう. 今回の調査は特別公開日に実施したので, 来園者は通常の開園日では入ることのできない場所 (「非公開エリア」 (注3) と「コウノトリの診療所」) を実施した手術室・治療室) も見学することができた. そこで今回の結果を紹介するまえに, 通常の開園日での一般的な行動パターンについて述べておきたい. 来園者が郷公園に入るゲートは一つで, 来園者の多くは, まず「コウノトリ文化館」に入って館内の展示を見たり, 文化館に隣接している公開ケージで飼育コウノトリを見学したりする. 屋根がなく湿地や草原を設けた公開ケージでは, 飼育コウノトリが生態展示され, 野外に近い環境でコウノトリが暮らす様子を間近で見ることができる.

それでは, 特別公開日の来園者は園内のどのようなところを訪れたのだろうか. 表8が示すように, 「コウノトリ文化館」79.7%と「公開ケージ」66.1%が多く, 「非公開エリア」37.4%, 「ビオトープ」27.3%, 「コウノトリの診療所」19.8%と続いている.

来園目的として「非公開エリアを見学する」と回答した人は15.3%だが, 実際に非公開エリアを訪れた来園者

表10. 印象に残ったこと (複数回答).

| 選択肢 | 件数 | (除不) % |
|-------------------|-----|--------|
| コウノトリの大きさ | 140 | 62.2 |
| コウノトリのクラッターリング | 34 | 15.1 |
| 飛んでいるコウノトリ | 133 | 59.1 |
| 人工巣塔のコウノトリ | 43 | 19.1 |
| 公開ケージで餌をついばむコウノトリ | 34 | 15.1 |
| 非公開エリアのケージ | 53 | 23.6 |
| コウノトリ文化館の展示 | 31 | 13.8 |
| 飼育管理棟の展示 | 17 | 7.6 |
| 大学院のパネル展示 | 3 | 1.3 |
| 「コウノトリの診療所」 | 18 | 8.0 |
| ビオトープ | 11 | 4.9 |
| 自然観察路 | 10 | 4.4 |
| その他 | 7 | 3.1 |
| 不明・無回答 | 15 | - |
| 計 | 240 | - |

表11. 野生復帰への関心.

| 選択肢 | 件数 | (除不) % |
|------------|-----|--------|
| かなり高まった | 94 | 42.7 |
| やや高まった | 116 | 52.7 |
| あまり高まらなかった | 6 | 2.7 |
| 全く高まらなかった | 0 | 0.0 |
| どちらともいえない | 4 | 1.8 |
| 不明・無回答 | 20 | - |
| 計 | 240 | 100.0 |

はその2倍以上にのぼっている. 来園時に特別公開のことを知り, 非公開エリアを訪れた来園者も少なからずいたと思われる.

それでは来園者が園内で過ごした時間はどのくらいだろうか. 表9に園内での滞在時間を示す. 「30分~1時間未満」42.9%, 「1時間~2時間未満」29.0%, 「30分未満」17.2%, 「2時間~3時間未満」9.7%, 「3時間~4時間未満」0.8%, 「4時間以上」0.4%となっている. 来園者の約6割が, 1時間未満の滞在時間であった. また, 観光バスによる来園者の滞在時間を調べたところ, 「30分未満」が3割, 「30分~1時間未満」が7割で, 園内で1時間以上を過ごした人はいなかった.

表10は, 郷公園のなかで何が印象に残ったのかを尋ねた結果 (複数回答可) を示している. 「コウノトリの大きさ」62.2%, 「飛んでいるコウノトリ」59.1%の二つが突出して高く, 次いで「非公開エリアのケージ」23.6%, 「人工巣塔のコウノトリ」19.1%, 「コウノトリのクラッターリング」15.1%, 「公開ケージで餌をついばむコウノトリ」15.1%, 「コウノトリ文化館の展示」13.8%, 「コウノトリの診療所」8.0%と続く. この結果からは, コウノトリの特徴や行動のなかでも, その大き

表12. 郷公園に期待すること.

| 選択肢 | 件数 | (除不)% |
|--------------------|-----|-------|
| コウノトリの飼育繁殖 | 102 | 60.4 |
| 飼育コウノトリの展示 | 8 | 4.7 |
| コウノトリの野生復帰に関する研究 | 18 | 10.7 |
| コウノトリの野生復帰に関する情報発信 | 25 | 14.8 |
| コウノトリの野生復帰に関わる人材育成 | 5 | 3.0 |
| コウノトリを題材にした環境教育 | 11 | 6.5 |
| その他 | 0 | 0.0 |
| 不明・無回答 | 71 | - |
| 計 | 240 | 100.0 |

さと飛んでいる様子が来園者の心に刻みつけられていることがうかがえる。

3. コウノトリの野生復帰に関する来園者の意識

表11は、「今回の来園によってコウノトリの野生復帰への関心は高まりましたか」という質問に対する回答である。「かなり高まった」が42.7%、「やや高まった」52.7%、「あまり高まらなかった」2.7%、「どちらともいえない」1.8%となり、「全く高まらなかった」と回答した来園者はいなかった。ほぼすべての来園者は、今回の特別公開に来園したことによってコウノトリの野生復帰への関心を高めたことがわかる。この点を確認したうえで、コウノトリの野生復帰への関心の高まりに関して、いくつかの項目とクロス集計した結果をみてみよう。

まず、来園者の居住地について次の3つにカテゴリー再編を行ない、コウノトリの野生復帰への関心の高まりとのクロス集計を行なったところ、5%水準で有意な関連が認められた(図1)。カテゴリーの再編によって居住地を、①豊岡市、②その近隣自治体のなかでコウノトリの放鳥拠点に有する、あるいは人工巣塔等で繁殖ペア

が成立している(朝来市・養父市・京丹後市)、③それ以外の3つに再編した。来園者のなかで豊岡市に居住している人は今回の来園によって野生復帰への関心が「かなり高まった」と回答した割合が少なく、豊岡市・朝来市・養父市・京丹後市以外から訪れた人は「かなり高まった」という回答の割合が多くなった。

次に、園内での滞在時間を次の3つに再編(1時間未満、1時間~2時間未満、2時間以上)し、コウノトリの野生復帰への関心の高まりとの関連について探った。その結果、5%水準で有意な関連は認められなかったが、図2からは滞在時間が長い来園者ほど野生復帰への関心が「かなり高まった」と答える割合が高いという傾向を読みとることができる。そして、園内に2時間以上滞在した来園者のなかで野生復帰への関心が「あまり高まらなかった」と回答した人がいなかったことは目を引く。

「かなり高まった」理由についての自由記述からは、「実物を初めて見たので」というコウノトリを実際に見たということ以外に、次のような理由が注目になる。それは、「飼育状況も聞くことができた」や「コウノトリの診療所を見て」、「みなさんのご苦労が間近で分か

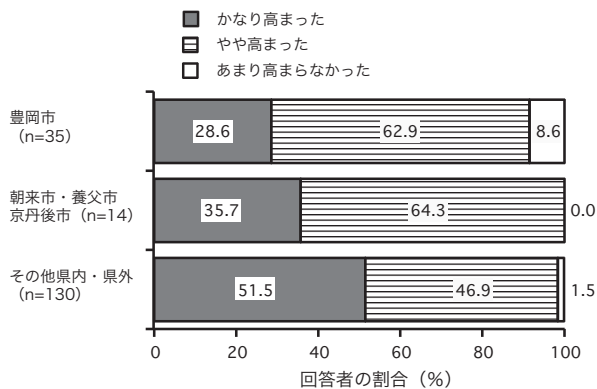


図1. 来園者の居住地と野生復帰への関心 (フィッシャーの正確確率検定, $p < 0.05$)

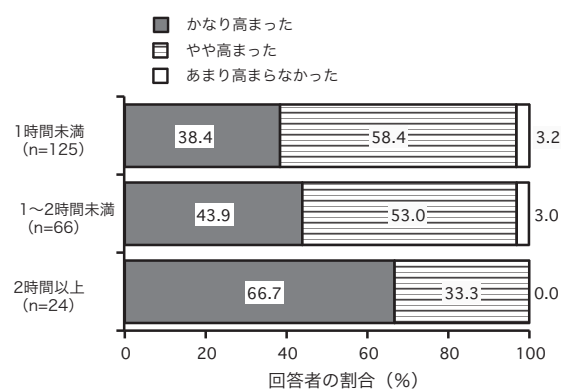


図2. 園内での滞在時間と野生復帰への関心 (フィッシャーの正確確率検定, $p > 0.1$)

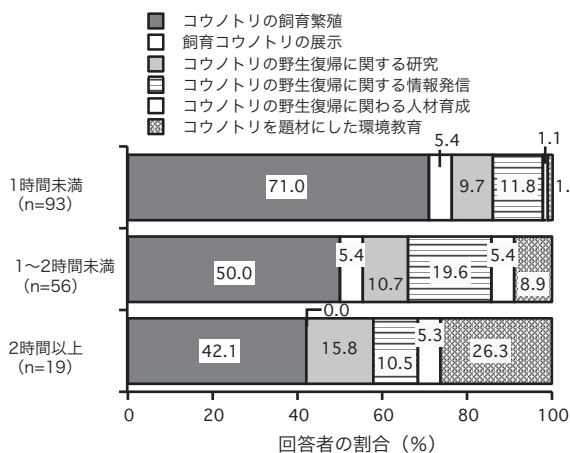


図3. 園内での滞在時間と郷公園に期待する事柄との関連 (フィッシャーの正確確率検定, $p < 0.01$)

ります」などのように、飼育員や獣医師といった飼育繁殖に携わるスタッフとの対話によって野生復帰のさまざまな取組みについて知ることができたことを、野生復帰への関心はかなり高まった理由として挙げている点である。この点は、郷公園の学びの場としての可能性を検討するさいのポイントのひとつになると思われるので、他の項目に対する回答の傾向と合わせて後ほど考察したい。

表12は、「今後、郷公園に期待することは何ですか」という質問に対する回答である。「コウノトリの飼育繁殖」が60.4%と飛び抜けて高く、次いで「コウノトリの野生復帰に関する情報発信」14.8%、「コウノトリの野生復帰に関する研究」10.7%、「コウノトリを題材にした環境教育」6.5%、「飼育コウノトリの展示」4.7%、「コウノトリの野生復帰に関わる人材育成」3.0%となった。

郷公園に期待する事柄に関して、いくつかの項目とクロス集計した結果をみてみよう。まず、滞在時間との間に1%水準で有意な関連が認められた(図3)。どの階級でも「コウノトリの飼育繁殖」を期待すると答えた割合がもっとも高いものの、1時間~2時間未満、2時間以上と滞在時間が長くなるほど、「コウノトリの飼育繁殖」という回答の割合が低くなる一方で、「コウノトリを題材にした環境教育」を期待するという回答の割合が高くなった。特別公開日に2時間を超えて園内に滞在する人と郷公園に環境教育を期待する意識との間には関連があることがわかった。

次に、年齢との間に5%水準で有意な関連が認められた(図4)。30代~40代の来園者は、今後の郷公園に対して「コウノトリを題材にした環境教育」に期待すると

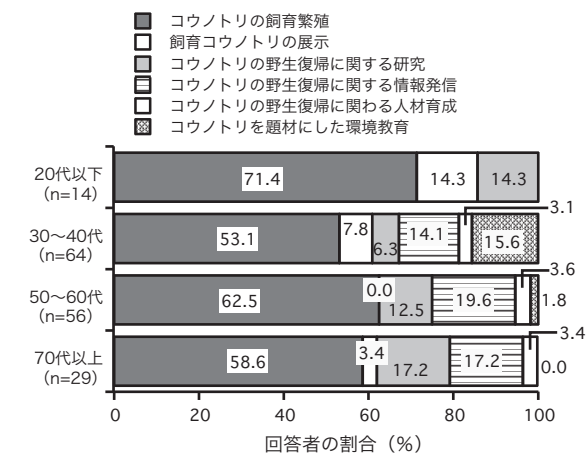


図4. 来園者の年齢と郷公園に期待する事柄との関連 (フィッシャーの正確確率検定, $p < 0.05$)

答えた割合が比較的高い。この結果から、30代~40代は子育て世代であり、環境への意識が相対的に高く、コウノトリも人も暮らしやすい環境について学ぶ環境学習への期待が高いと考えることができるだろう。

考察

前節で示した、特別公開日の来園者の園内行動とコウノトリの野生復帰に関する意識についての調査結果をふまえて、郷公園が提供している学びの場の現状について検討しよう。

来園者のなかで、コウノトリの生態や野生復帰の取組みについて「知る」ことを目的に郷公園を訪れた人は1割にも満たず、6割以上が「コウノトリを間近で見る」、2割弱が「非公開エリアを見学する」ことを目的に来園していた。それにもかかわらず、ほぼすべての来園者は特別公開日の来園によってコウノトリの野生復帰に対する関心を高めていた。

そのうえで注目したいのは、園内に2時間を超えて滞在した人と郷公園に対して「コウノトリを題材にした環境教育」を期待する意識との間に関連があるということである。自由記述を参照すると、長時間の滞在が園内のあちらこちらを訪れることを可能にし、その過程で郷公園がもつ自然の豊かさを実感したことによって、それを題材にした環境教育を望む気持ちを抱かせたと考えられる。時間をかけて園内に点在するジオトープや自然観察路などを散策したことで、環境学習に活用できる学びの場としての価値を来園者が認識したといえるだろう。

もう一点、特別公開日の滞在時間に関して注目したいのは、滞在時間が長い来園者ほどコウノトリの野生復帰



図5. 尾根に建設中の東屋と祥雲寺巣塔で育雛するコウノトリ. 右側の建物は「コウノトリ文化館」.

への関心が「かなり高まった」と答える割合が高いという傾向がみられたということである。しかも、園内に2時間以上滞在した来園者のなかで野生復帰への関心が「あまり高まらなかった」と回答した人はいなかった。また、関心が「かなり高まった」理由の自由記述からは、「飼育状況も聞くことができた」などのように、飼育繁殖に携わるスタッフとの対話によって野生復帰のさまざまな取組みについて知ることができたことが、その理由としてうかがえる。

これらのことから、長時間滞在するなかで、コウノトリの治療室や繁殖ケージなどの野生復帰を支える様々な舞台裏を訪れ、飼育繁殖スタッフと業務現場で直接対話することをつうじて、コウノトリに関する知識をより多く得ることができ、野生復帰を日常的に支えるスタッフへの共感も促され、野生復帰への関心が高まったと推察される。このことが示唆しているのは、来園者が滞在時間にゆとりを持つことによって、特別公開日に提供されている飼育繁殖スタッフと業務現場で直接対話するという機会が、学びの場として活かされやすいということである。

以上、特別公開日の来園者調査の結果から、来園者が①野生復帰に携わる人と現場で直接対話、②園内随所の散策というかたちで、園内にできるかぎり長く滞在することによって、郷公園内の様々な場所が学びの場として効果的に機能しやすいことが推察される。もちろん、園内での滞在時間の長短については種々の要因が影響しているため、通常の開園日での調査も含め、さらなる調査研究が必要であることはいうまでもない。とはいえ、今

回の調査結果が示している①と②の要素を内包した園内滞在は、特別公開日に限らず、通常の開園日でも工夫次第で可能だろう。

そして本研究の関心である、コウノトリと共生する地域づくりに取り組む人々にとっての学びの場についても、①と②の要素を内包した園内滞在のあり方という観点から考えることができるのではないかと、この点を次節で述べて、まとめたい。

まとめ

郷公園は現在、園内の西自然観察路の尾根に東屋（約10m²）を建設中で、そこに登る散策路も整備している（図5）。その東屋からは、郷公園前に立つコウノトリの人工巣塔（祥雲寺巣塔。2016年、2017年に祥雲寺ペアが繁殖に成功）を含め、祥雲寺集落の家並みや田んぼを一望できる。祥雲寺集落は、郷公園が立地する地元であり、1994年に郷公園建設の受入れを決定してから今日まで、コウノトリの野生復帰を郷公園とともに担っている。そして集落の南側に広がる田んぼは、コウノトリ育む農法の発祥の地である。つまり東屋からは、祥雲寺の人々と郷公園が試行錯誤を繰り返してきた野生復帰の歴史が刻み込まれた風景を見ることができる。その風景には、コウノトリとの共生を模索してきた祥雲寺集落の人々の価値観と活動の履歴が織り込まれている。したがって、東屋から眼下の風景を眺めつつ祥雲寺の人々と対話することができるならば、コウノトリと共生する地域づくりとはどのような営みなのか、それがどのような

地域を形成することになるのかについて具体的にイメージしながら深く学べると思われる。祥雲寺集落を一望できる東屋という場所は、全国各地でコウノトリと共生する地域づくりに取り組んでいる人々にとって有意義な学びの場になるだろう。

以上から、郷公園はコウノトリの野生復帰の進展に応じて必要となる学びの場を、園内の様々な施設・場所、そしてスタッフ・地元の人々の知識や技能を活用して、その都度提供しうる力を有しているといえる。郷公園が学びの場を創出しつづけることは、コウノトリの野生復帰の実践が内包している不確実性や関係者の意見の相違といった危機を、地元の人々が学びをつうじて自ら乗りこえていくことに貢献し、各地の活動を力強く後押しすることになる。

注

- (1) 郷公園のソシオ研究部は、人文社会科学系の3名の教員から構成されている。教員の専門は、それぞれ地域歴史学、地域社会学、地域計画学である。
- (2) 自然再生事業や環境保全などにおいて、対象となる自然の不確実性や取り組む社会の複雑さに対応する仕組みとして「アダプティブ・マネジメント」の考え方が主流になりつつあり、その仕組みを動かし続けるための鍵のひとつとして「学び」に着目する研究（宮内 2017）がみられるようになってきた。本研究の関心も、このような考え方と着目点から示唆をえている。
- (3) 郷公園の非公開エリアでは、現在約50羽のコウノトリを繁殖などの目的に合ったケージで飼育している。非公開となっているのは、神経質な鳥であるコウノトリが人間に驚いて飛び上がりケージに接触してケガをするのを防ぐことと、放鳥による野外生活に備えて人間に慣れさせないためである。

摘要

兵庫県立コウノトリの郷公園のソシオ研究部は、コウノトリの野生復帰の進展に応じて学びの場が必要になるという側面に着目し、学びの場の創出をめぐる郷公園の可能性についての調査研究に取り組みはじめた。今回はその一環として、特別公開日の来園者に対して園内行動とコウノトリの野生復帰に関する意識についての調査票調査を行ない、郷公園が提供している学びの場の現状について検討することを試みた。その調査から、来園者が①野生復帰に携わる人と現場で直接対話、②園内随所の散策というかたちで、園内にできるかぎり長く滞在することによって、園内の様々な場所が学びの場として効果的に機能しやすいことが推察される。そして本研究の関心である、郷公園がコウノトリと共生する地域づくりに取り組んでいる人々を視野に収めて創出しうる学びの場についても、①と②の要素を内包した園内滞在のあり方という観点から考えることができる。

キーワード 飛来造巢型のコウノトリ野生復帰、学びの場、現場での直接対話、兵庫県立コウノトリの郷公園への来園者

引用文献

- 浅野敏久・林健児郎・李 光美・塔 娜 (2009) コウノトリの野生復帰と観光化—来訪者アンケート調査から— 環境科学研究 (広島大学大学院総合科学研究科紀要II), 4: 35-50.
- 菊地直樹 (2017) 「ほっとけない」からの自然再生学—コウノトリ野生復帰の現場— 京都大学学術出版会, 京都, 322 p.
- 宮内泰介 (編著) (2017) どうすれば環境保全はうまくいくのか—現場から考える「順応的ガバナンス」の進め方— 新泉社, 東京, 343 p.

(2019年3月15日受理)